

國學院大學學術情報リポジトリ

An Analysis of TOEIC L&R IP Scores at Kokugakuin University

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土肥, 充, 久保田, 正人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002157

國學院大學における TOEIC L&R IP のスコア分析

土肥 充・久保田正人

【要 旨】

本研究の目的は、國學院大學で過去6年間に44回実施されたTOEIC L&R IPの受験者延べ11,653名の得点の傾向を包括的に分析することである。このうち複数回受験した学生の実人数は1,801名であり、この複数回受験者の得点の推移を詳細に調査した結果、在学中に得点が増加する場合と減少する場合のばらつきが大きいなかで、平均すると統計的に有意な上昇を示していることが判明した。複数回受験者は受験回数が多いほど上昇が大きい傾向も確認されたが、これは練習効果だけでなく、受験回数が多い学生は意欲が高く、長期間にわたって多くの知識と技能を蓄積したことによるものと推定される。また、初回の得点が低いほど上昇量が大きいという傾向も明らかで、最初は英語力が低くとも学習を継続することが成果として表れることが示された。これらの傾向は國學院大學だけの特殊なものではなく、他大学で実施された同様の研究と同様の傾向を示した。以上の結果を学生にフィードバックすることは、英語学習と外部テスト受験の動機付けの材料として有効に活用できると結論した。

【キーワード】

TOEIC L&R IP、英語、複数回受験、上昇量

1. はじめに

大学入試センター試験に代わって2021年1月から開始された大学入学共通テストでは、当初は複数の民間の英語試験を活用する予定であったが、費用や受験会場といった実用性の問題を理由に文部科学省が2019年に導入の見送りを表明した。しかしながら、だからといって民間試験の妥当性や信頼性が疑問視されたのではなく、各学校やクラスの単位で作成された英語テストと比較して、全国レベル、世界レベルで研究・開発・実施・分析されている民間の外部試験のほうが英語力を客観的に示す尺度として望ましいことにかわりはない。大学であれ、高校や中学校であれ、英語の授業で英語力を伸ばすことが目的のひとつであるのは当然であるが、近年は大学生の能力や目的意識が多様化し、学んだ英語を生かすべき場所が留学であったり、ビジネスであったり、海外からの情報収集であったり、日本文化の発信であったりし、大学が一方向的に英語学習の目的を決めつける時代ではない。また英語学習の成果を測定する方法も同様で、共通テストで活用する予定であった民間の英語試験やその他にも、多くの英語テストが存在する。本論文では各種テストの違いについては論じないが、日本の企業で幅広く活用され、國學院大學でも多数の学生が受験するTOEIC L&R IPの結果を本研究の題材とする。

國學院大學では、毎年延べ1万人を超える学生を対象に共通教育英語科目を400コマ以上開講しているが、2021年度から新カリキュラムを導入し、習熟度別、技能別、内容別の

授業を提供し、飛び級制度の新規導入によって習熟度に合わせた授業の自主的な選択が可能になった。従来から学内で団体受験制度を利用して実施しているTOEIC L&R IPは、「英語の健康診断」(久保田・土肥 2020)と位置付け、各学生が現在の英語力を客観的に認識し、今後の学習目標の設定に活用し、将来の就職や学内で選考する派遣留学制度の英語力証明書として活用するなどの目的もある。さらに、飛び級の目安に活用することが可能であるとともに、複数回受験することによって一定期間の学習の成果を知るための指標としても活用が可能である。受験結果は各学生に通知されるだけでなく、毎回学内の会議で集計結果が報告されているが、これまで長期的かつ包括的な分析は行われていなかった。

国内外の各種学会や研究会等では、TOEIC等の外部試験を活用した英語教育の成果の発表が数多く行われている。一般的には、セメスターの最初と最後に外部試験を全員に受験させ、特定の授業や学習方法の効果を検証する場合や、大学や学部の単位で構成員全員に外部試験の受験を義務付けることにより、学年単位や在学期間を通しての英語力の推移を測定する場合などが多い。全員の受験が義務付けられている場合、欠席者を除外する等の手間はあがるが、同時期に同一受験者が複数回受験した「対応のあるデータ」を多数収集可能で、分析も比較的容易である。

その一方で國學院大學の場合、TOEIC L&R IPの受験を義務付けているのは1年生の年1回だけであり、またコロナ禍の影響で2020年度は一斉に学生を集めて実施することもできなかった。複数回受験者の得点の推移を調査するためには、義務的に1年生全員に一斉に実施した回のデータだけでなく、希望者のみを対象として年に数回有料で実施している回のデータも合わせて分析をする必要がある。その場合、多数のデータ群から複数回受験者を検索し、毎年学年が進行する各受験者の受験時点での学年と時期を判別し、それらを組み合わせることによって対応のある複数回受験データのセットを抽出するという煩雑な作業が必要となる。そのような手法で複数回受験者の得点の上昇を分析した論文には、土肥(2006)、土肥・柳瀬(2009)、土肥・張(2014)の千葉大学における一連の研究がある。これらの研究は、TOEIC L&R IPの複数回受験者の受験回数別、学年別、学部学科別の上昇量の傾向等の分析を包括的に行ったもので、筆者らが過去数十年にわたって複数の学会誌等で調べた限りでは同様の研究は他に見当たらなかった。また、TOEIC実施団体である一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会(IIBC)に問い合わせたところ、すべての研究を把握しているわけではないが、他には見られない研究であるとの回答を得た。本研究では筆者らが移籍した國學院大學においても同様の手法や新規の手法を使って、TOEIC L&R IPの得点上昇の傾向を分析するとともに、前掲千葉大学との傾向の差を調査することを目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3つである。

- (1) 國學院大學において過去6年間に義務的受験と任意受験によってTOEIC L&R IPを受験した延べ人数全員分の記述統計を示すこと。
- (2) 上記のうち、複数回受験した学生の在学中の得点上昇の傾向を複数の観点から示すこと。
- (3) 國學院大學の得点上昇の傾向を千葉大学と比較すること。

3. 研究の方法と分析結果

(1) テスト実施日と各回の受験者数

本論文では、分析手法とその根拠についての最小限の説明と客観的数値や図表による分析結果を「3. 研究の方法と分析結果」に示し、結果の考察についてはまとめて「4. 結果の考察」に示すこととする。本研究で分析対象とするデータは、2015年度から2020年度の6年間44回延べ11,653名である(表1)。なお、本論文に示した統計データの数値は丸めの誤差を含む。

表1 TOEIC L&R IP 実施日と受験者数

2015年度	5/30(208), 7/11(178), 10/24(209), 12/5(218), 1/9(175), 2/5(250)	6回 1,238名
2016年度	5/28(246), 7/9(225), 9/20(120), 10/29(92), 12/3(154), 2/9(218), 3/13(212)	7回 1,267名
2017年度	5/20(238), 7/15(263), 9/4(216), 10/28(201), 12/2(217), 1/31(1,689)*, 2/9(232), 3/14(130)	8回 3,186名
2018年度	7/7(261), 9/4(92), 9/11(27), 10/27(124), 12/1(178), 12/25(1,717)*, 2/14(199), 3/12(189)	8回 2,787名
2019年度	5/18(187), 7/13(164), 9/6(100), 10/26(56), 12/14(176), 1/30(1,645)*, 2/13(141), 3/13(103)	8回 2,572名
2020年度	11/28(40), 12/5(26), 12/19(69), 2/12(145), 2/26(92), 3/12(89), 3/26(142)	7回 603名

2列目の各回の表示形式は、月/日(受験者数)で、*は1年生のみが義務的に受験した回。

表1のうち、*を付した3回5,051名の試験日は1年生のみが義務的に無料で受験した。なお、受験申込の際には「個人情報の取り扱いについて」と題する文書にデータ分析のために得点情報を利用することを示し、各学生の署名によって同意を得たが、本論文には学生個人の氏名や得点等の個人情報を含まず、集団としての統計分析結果のみを示した。

(2) 学科別、学年別の記述統計

全44回で受験した延べ11,653名のデータを15の学科等(学科および専攻)と「その他」に区分して人数、平均点、標準偏差(SD)、最高点、最低点をTotal、Listening、Readingに分けて表2に示した。

表2 学科等に区分した記述統計

学科等	人数	Total				Listening				Reading			
		平均	SD	最高	最低	平均	SD	最高	最低	平均	SD	最高	最低
A	2321	514.2	132.08	960	130	289.1	69.12	495	90	225.1	73.89	465	5
B	302	430.6	130.87	875	150	241.1	71.96	475	80	189.5	69.38	400	60
C	822	429.5	137.18	865	130	241.9	72.21	460	65	187.7	74.77	410	35
D	196	425.7	121.42	845	200	238.8	67.64	450	100	186.9	64.46	395	65
E	287	425.6	131.79	820	135	241.9	69.84	435	95	183.7	72.72	395	5
F	1027	420.9	141.64	940	60	240.3	73.68	480	55	180.6	76.34	460	5
G	920	413.4	119.09	895	145	230.1	64.34	455	65	183.3	65.14	440	50
H	436	406.3	127.67	870	120	230.6	68.55	470	55	175.7	69.07	400	5
I	1157	401.2	115.85	805	20	229.5	62.50	465	15	171.7	63.75	420	5
J	1888	399.8	122.03	910	100	227.6	67.64	485	70	172.1	64.62	455	5
K	690	393.3	132.05	905	15	227.1	74.24	480	5	166.2	67.22	425	5
L	541	368.5	137.01	870	125	210.6	75.04	475	75	157.8	69.96	415	50
M	144	361.3	118.76	765	155	214.5	71.95	415	75	146.8	57.61	360	60
N	328	355.8	114.95	820	155	209.1	67.16	440	80	146.7	56.26	380	60
O	558	338.1	133.10	965	40	197.6	75.74	485	35	140.5	66.60	480	5
その他	36	584.4	168.05	950	300	309.2	82.37	490	185	275.3	92.84	470	115
全学生	11653	423.9	138.40	965	15	240.7	74.48	495	5	183.3	73.35	480	5

「その他」とは、正規の学部生以外である大学院生や科目等履修生等である。なお、学内の会議の配布資料では実際の学部や学科等の名称を表記したが、本論文では慎重を期して学科等の名称を匿名化し、Totalの平均が高い順にA～O学科と表記した。國學院大學では学科等を示す英字の略号があるが、本論文の表記はこれとは異なり、単なるアルファベット順で示した。Listening SectionおよびReading Sectionそれぞれの理論的最高点と最低点は495点と5点で、その合計であるTotalの最高点と最低点は990点と10点であるが、TOEICテストの詳細と全国での各種集計結果については、国際ビジネスコミュニケーション協会（2021）やEducational Testing Serviceのウェブサイトを参照されたい。

表2の結果は事実の一面を示しているが、必ずしも大学の教育力や在学中の本人の努力だけでなく、入学前の学力差も当然影響している。本論文では学生の受験時の「学年」も考慮するが、ここでいう学年は学籍簿上の学年ではなく、休学期間も含めて入学年度を1年生、2年目を2年生という扱いとする。休学期間であっても英語学習を継続する学生もいれば継続しない学生もいて、休学期間だからと言って英語力の上昇（または下降）が止まるわけではない。このような考えに基づき各学生の受験時の学年を算出した結果、受験者の最高学年は7年生

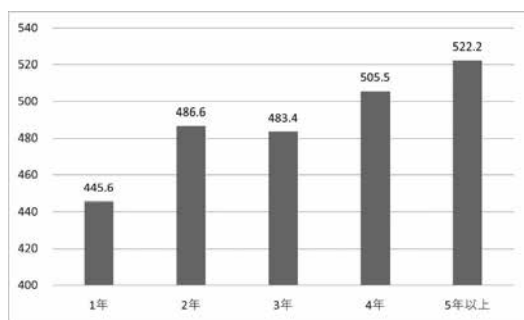


図1 任意受験者の学年別平均点

ということになった。

次に、学年ごとの英語力の平均を図1に示したが、前述の表2に示したデータには義務的に受験した1年生5,051名と任意受験した全学年の延べ6,602名を含み、前者のTotalの平均点が352.6点、後者が478.5と大きく異なる。図1では義務的受験者を除外し、任意受験した学生のみを対象とした。図1では、ほぼ学年ごとに平均点が上昇しているように見える。しかし、図1の問題点は各学年の受験者や人数が異なることであり、同一受験者が時間を経て受験したら上昇するのか下降するのかを正確に示していない。ここからは、このような問題点の解決を目指し、在学中の得点の推移を知ることを目的に、複数回受験者のデータを中心に分析する。

(3) 複数回受験者の抽出と得点分布

6年間の全44回延べ11,653名のデータを学籍番号(受験番号)で機械的に抽出した結果、在学中に1回だけ受験した学生が5,987名で、2回以上受験した学生の延べ人数が5,666名、2回以上受験した学生の実人数が1,801名であることが判明した。この複数回受験者1,801名のうち、2回だけ受験した学生はその2回の得点上昇を見ればよいが、3回以上受験した学生については、途中回の得点は無視して、初回から最終回への上昇量を見ることにした。途中の過程もちろん重要ではあるが、分析をわかりやすくする意図もあり、最初にどれだけの英語力だった学生が、最終的にどれだけ伸びたかを知ることが重要と考えたからである。1,801名の初回と最終回の受験時期は、ともに1年次の場合もあれば、1年生から最終学年という長期におよぶ場合もある。

1,801名の初回と最終回の平均受験間隔は418.5日で、Total, Listening, Readingの平均上昇量はそれぞれ55.2、30.5、24.7であった。t検定の結果はそれぞれ $t = 22.676$ 、 $t = 22.084$ 、 $t = 17.182$ で、1%水準で有意であり、Cohenの効果量はそれぞれ $d = .43$ 、 $d = .45$ 、 $d = .35$ であった。複数回受験者全員の初回受験時と最終回の50点刻みの得点分布を重ねて示したのが、図2である。図2を見ると、550点付近を境に低得点者が減り、高得点者が増えている。前述のt検定の結果も合わせると、統計的に有意に平均点が上昇し、全体の分布が高得点側に移動しているように見える。

しかし、平均や分布が順調に上昇しているのに対し、個々のデータを観察すると異なる結果が見えてくる。複数回受験者1,801名のひとりひとりがど

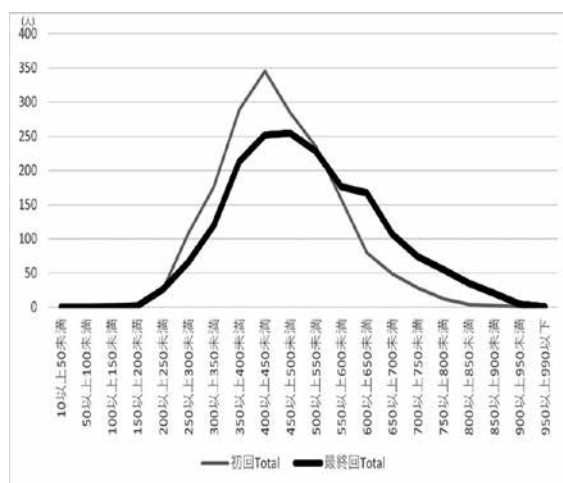


図2 初回受験時と最終回受験時の分布の移動

れだけ上昇しているかを図示したのが、図3である。図3では全員の初回のTotalの得点を原点にそろえ、横軸を最終回までの年数、縦軸を上昇量として、最終回のTotalの得点までを直線で図示した。

同じ1,801名の複数回受験者を、異なる観点から分析し直したのが表3と図4である。表3と図4では、受験回数別に、初回から最終回へと何点上昇したかを示している。前述の図3では下降している学生も見られたが、平均すると、どの回数も上昇していた。

同じデータをさらに別の角度から示したのが図5の初回Total得点別の上昇量である。

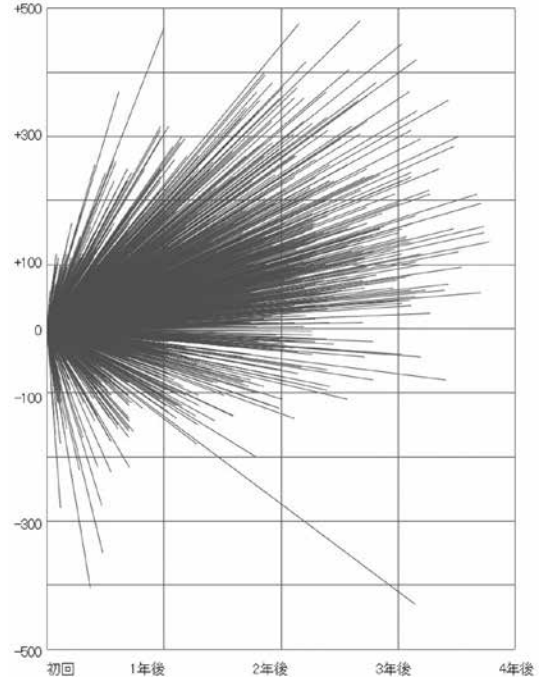


図3 複数回受験者全員の得点上昇量

表3 受験回数別上昇量

4. 結果の考察

多くの自然現象や社会現象と同様に、英語学習やTOEICの結果にもさまざまな要因が複雑に影響している。本研究では過去6年間にわたって44回実施したTOEIC L&R IPの結果を多面的に分析することを目指した。筆者らが千葉大学で過去に行った分析よりも、大規模なデータで分析を行うことができた。

國學院大學で2019年度に発足した英語教育センターやその前身となるLLC (Language Learning Center) が主催し

てTOEIC L&R IPを年に数回実施してきたが、各回の受験者は表1に示したように少なければ数十名程度で、任意受験者の学年や学科や受験の動機や英語力もばらつきが大きく、各回の分析をするだけでは、あまり明確な傾向を示すことはできなかった。しかし、44回実施して受験者が延べ11,653名も集まれば、全体としてある程度の傾向が明らかになってきた。

まず表2を見ると、どの学科もListening、Reading、Totalにおいて満点に近い高得点

受験回数	人数	受験間隔 (日) (最終回-初回)	上昇		
			T	L	R
2	923	285.7	26.2	15.0	11.2
3	386	445.8	54.4	29.2	25.2
4	196	553.3	82.6	48.1	34.5
5	122	594.6	113.0	62.4	50.5
6	78	707.2	130.6	68.5	62.2
7	36	772.3	139.9	73.2	66.7
8	27	820.1	149.1	73.9	75.2
9	17	925.6	123.2	72.4	50.9
10+	16	1010.7	177.5	98.8	78.8
全回数	1801	418.5	55.2	30.5	24.7

者から理論上の最低点付近まで、きわめて個人差が大きいことが明らかになった。高得点者の多くは帰国子女であると考えられるが、100点未満の低得点者は英語力が低いというよりは、真面目に受験しなかったり、体調不良で集中できなかったりした場合がほとんどと推測している。とくに1年生が義務として受験した3回の平均点は、任意受験の41回の平均点より100点以上低く、受験者の意欲の影響が大きいと言える。また、個人差が大きくとともに、各学科100名以上のデータが集まると、やはりある程度の傾向が表れ、学科の平均点が高いところと低いところで170点以上もの差がついた。学科名は匿名としたが、実際に英語授業を担当したときの学生の様子や平均点にも表れているような印象を筆者らは受けている。本研究はTotalの得点の分析が中心で、ListeningとReadingについての詳細な分析を行わなかったが、表2を見るとどの学科も50～60点程度Listeningの平均が高い。これは国際ビジネスコミュニケーション協会（2021）が示す全国的な傾向と一致している。

1年生の義務的受験の結果と全学年の任意受験の結果の差が大きいことは、学年別の分析にも影響を与えることは明らかである。図1では任意受験者6,602名だけに限定して、学年別の平均点を算出した。概ね学年が上がるほど平均点が高くなる傾向が見えるが、実際には3年生は就職活動を意識したために受験者数が多いようで、各学年の受験者層が異なり、このデータだけで同一学生が学年を上がるにつれて英語力を伸ばしているとは断定できない。

そこで「対応のあるデータ」を抽出するために、複数回受験者1,801名の得点の推移を調査することを目指し、図2を作成した。50点刻みの得点分布が初回受験から最終回受験にかけて上昇しているように見え、実際にt検定の結果でも平均点に有意差が得られた。これまでに筆者が調査した多数の先行研究のほとんどは小規模な研究であり、平均点の差の検定と得点分布の山が全体的に移動していることによって「勝負あった」かのように英語力が伸びたという結論を出している。しかしながら一見全体的に伸びているように見えても、個々の受験者ひとりひとりの得点の推移を図3のように図示することによって、図

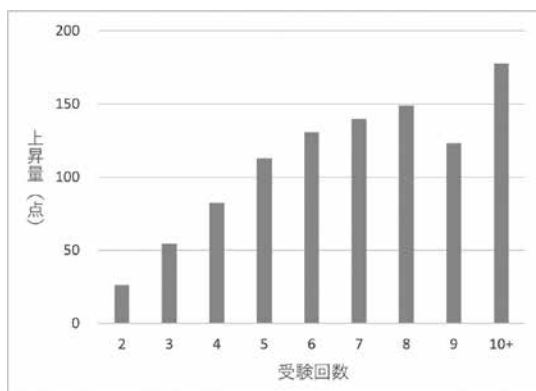


図4 受験回数別Total上昇量

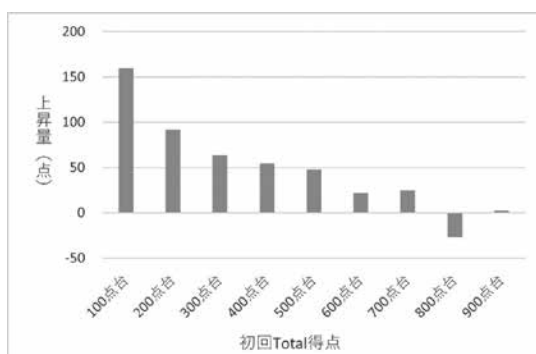


図5 初回Total得点別上昇量

1や図2から受ける印象と大きく異なる結果を示したことが本研究の特徴のひとつである。図1や図2のようなスコア分析は多くの研究論文や報告書でみられるが、図3と組み合わせて示したことは、千葉大学の一連の研究でもなかった新しい成果である。本研究は受験者数が多く、平均点や全体の得点分布だけでは見えない傾向を説得力をもって示すことができた。

國學院大學の複数回受験者1,801名の上昇の傾向を図3に示したが、これは土肥・柳瀬(2009)が千葉大学の複数回受験者902名について調査した上昇の傾向(図6)と酷似していることがわかる。図2に示した集団としての上昇傾向と、両大学の図3と図6の個々の受験者の上昇傾向には、大きな差があることが明確になった。ともに平均的には上昇の傾向を示しているが、実際の内訳としては下降している受験者も多数存在する。

このグラフを見て、大学で英語の授業を履修しているにもかかわらず英語力が下降することに疑問を持つ人がいることを筆者らは承知しているが、これが現実であることを直視しなければならない。なかには大学で英語学習に真剣に取り組まなかったり、卒業単位を修得したために英語学習をやめてしまったりした学生もいるが、その一方で、真剣に学習したつもりなのに、得点が下降して落胆したと筆者の一人に相談に来た学生もいる。学生にわかりやすい回答のひとつは、スポーツにたてることである。部活動で訓練を継続したにもかかわらず、記録が伸びなかったり、試合で負けたりという悔しい経験をしたことがある学生は多い。スポーツでも英語学習でも心身の調子や偶然的要因が影響することがあり、TOEICの場合は測定誤差がプラスマイナス25点であることも公表されている。あるときに何らかの理由で得点が悪くとも、今後も学習や訓練を継続することによって、

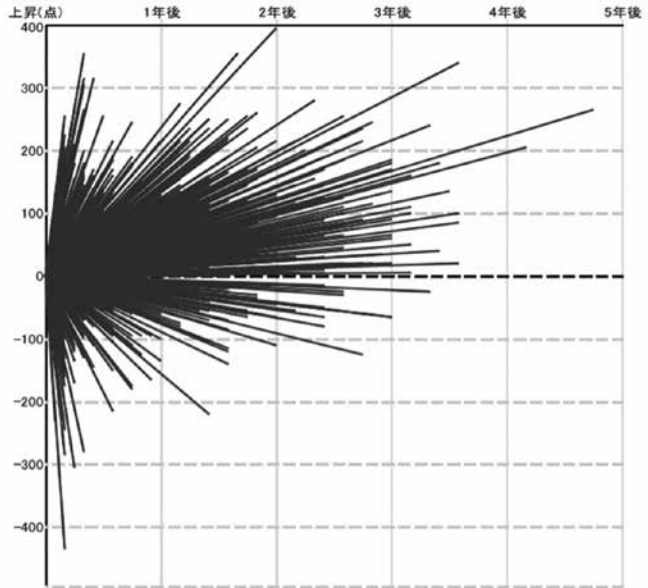


図6 千葉大学における複数回受験者の上昇傾向
(土肥・柳瀬 2009)

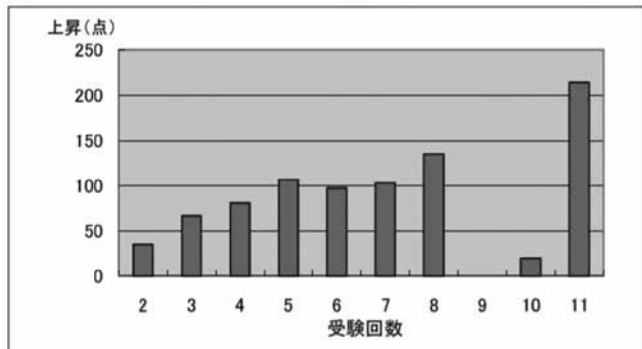


図7 千葉大学における受験回数別の
上昇傾向(土肥・柳瀬 2009)

いつかは改善すると励まし、逆に学習や訓練をやめてしまえば能力を伸ばすどころか維持することも難しいと学生に話すようにしている。

國學院大學の複数回受験者1,801名の同じデータを受験回数別に分けて集計したのが表3と図4であるが、千葉大学の先行研究による結果を図7に引用した。千葉大学の対象者数は902名で、國學院大學の約半数である。とくに図7に示した千葉大学の6回以上受験者数は各回0～9名しかなく、必ずしも信頼できるデータではなかったが、國學院大學の各回16名以上のデータでも同様の右肩上がりの傾向を示したことは、両大学のデータの信頼性を相互に補完したと言える。受験回数が多いほど得点が伸びる傾向を表面的に解釈して、単なる練習効果だと早合点する人もいるかもしれないが、英語教員としての経験上、2時間の受験経験を数回繰り返すだけでこんなに伸びるとは考えられない。英語学習をしなくても何度もTOEICを受ければ得点がぐんぐん伸びるなどという、詐欺のような話を学生にすることはできない。実際に表3に示した10回以上の受験者16名が漫然と受け続けるだけで得点が伸びると信じて、平均1,011日の長期にわたって多額の費用を投資し続けたとは考えにくい。複数回受験者の上昇量の一部は練習効果であろうが、それだけではこの右肩上がりの傾向を説明することはできない。受験時に集中力を発揮するのは当然であるが、受験と受験の間に授業を真剣に履修したり自学自習をしたりという努力を長期間継続した成果であると推定するのが自然である。両大学とも2回や3回程度の受験回数では、受験間隔が少ない（つまりその間の学習量が少ない）こともあって、上昇量は比較的小さい。図3や図6に示したように、下降する学生も相当数含まれる。図4を学生に見せることにより、長期的計画を立てて継続的な学習をすることと英語力の診断を定期的に受けることの重要性が示せると言える。

さらに別の観点で國學院大學と千葉大学の複数回受験者の類似性を示すのが、図5と図8の比較である。いずれも初回の得点が低い学生ほど上昇しやすいという傾向を示している。たとえば初回到900点ちょうどだった学生は、どれだけ努力をしても満点の990点まで最大で90点しか伸びる余地がなく、その意味では当然の結果と言える。しかし、この結果を学生に示すことは、とくに英語力が低い学生への動機付けとなる。英語が苦手な挫折しようとしている学生に、「伸びしろ」がこれだけあることを示すことで学習

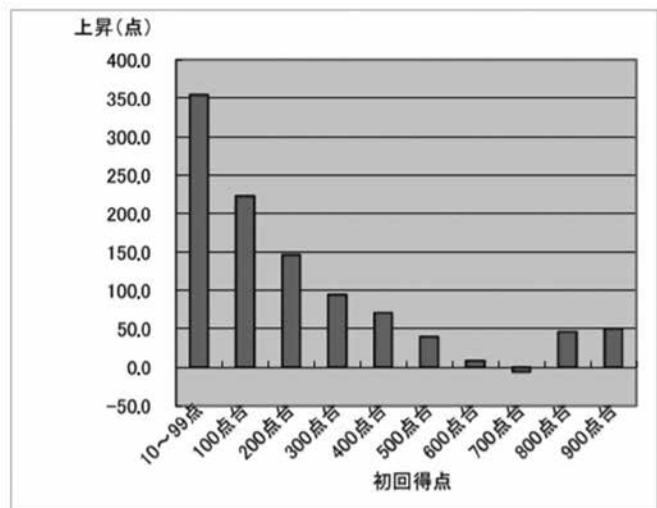


図8 千葉大学における初回得点別の上昇傾向
(土肥・柳瀬 2009)

継続への意欲を喚起できると考える。

以上、國學院大學と千葉大学の間では、個々の学生の上昇のばらつき、受験回数別の平均上昇量、初回得点別の平均上昇量の3点できわめてよく似た結果が得られた。また、千葉大学は平均して一日あたりTotalが0.11点上昇したこと(土肥・張 2014 p.20)を示したが、今回の國學院大學のデータでは、平均418.5日の受験間隔でTotalが55.2点上昇したことから、一日あたり0.13点上昇したことになり、これもほぼ一致する。これらの共通点は偶然の一致というよりは、必然に近いものと考えられる。前述の通り千葉大学以外のデータがないので、すべての日本の大学で普遍的な傾向とまでは言えないが、両大学はほとんどが英語を専門としない学生で、1年生のみまたは2年生までで卒業要件単位を取ってしまう学生が多く、TOEIC L&R IPを1回だけ義務として課していた等の共通点があり、むしろ今回の國學院大學の結果は英語教員としての経験上、筆者らにはほぼ予想できていた。経験上の主観を千葉大学と國學院大學の多数のデータで客観的に実証できたことは、価値が高いと考える。一大学のみで実証していたことを学力も学部構成も受験者数も異なる二大学で示すことは、筆者らが行ってきた独自の研究の信頼性をより高めることになったと言える。両大学の平均点は大きく異なるが、上昇量という観点で見ると同様の傾向であった。このことにより、入学時の英語力が高いか低いかでその後の伸びも決まってしまうのではなく、努力が結果に反映されていることがわかる。

5. 今後の課題

國學院大學で任意で複数回TOEIC L&R IPを受験した1,801名の平均上昇量に関する限り、統計的有意差のある上昇が見られたが、統計的に有意であることは十分であることを意味せず、むしろ満足できる結果とは言えないと考える。やむを得ない理由があったとしても下降した学生も多く、上昇後の分布を図2でも、社会で必要とされる英語力(たとえば600点や730点)を持つ学生は少数派である。自主的に有料で何度も受験するほど意欲が高い学生でもこのような結果であるから、仮に全学生に義務的に複数回受験させたら、もっと悪い結果になることは十分予想できる。英語を専門とする学部やとくに全学的に英語教育に力を入れる大学であれば、多くの学習時間を学生に課し、外部テストも複数回義務化しているが、國學院大學の英語教育の体制と英語力診断の体制には限界がある。

本研究は、筆者らの独自の分析方法を用いて國學院大學の傾向を分析し、前任校である千葉大学との共通点も明らかにしたが、今後もより詳細な分析を継続したいと考える。たとえば、受験した学年や時期による上昇量の傾向、ListeningとReadingそれぞれの傾向、TOEFL ITP等の他のテストとの関連、SpeakingやWritingの技能との関連、授業履修履歴とテスト結果との関連、等の課題があり、今後も研究を継続したい。

英語教育センターはテストの実施と分析をするだけでなく、英語カリキュラムの企画ならびに授業実践と、英語力の診断とを、車の両輪として走り続ける必要がある。その点で、

今回分析した過去6年のデータは旧カリキュラムの成果と言える。2021年度からは新カリキュラムが始まり、科目編成が一新され、飛び級制度も始まり、どのような影響が出るかが興味深い。過去1年以上にわたってコロナ禍で多くの授業が遠隔化したり、留学の機会が奪われたり、ネイティブスピーカーと会話を練習するEnglish Loungeが休止されたり、1年生全員が一斉にTOEIC L&R IPを受験する機会がなかったり、さまざまな点で学生にも停滞感があったが、徐々に正常に戻りつつある。今年度から始まった新カリキュラムでは多くのテーマ別科目が新設され、CALLシステムが授業や独習のために導入された。今後の英語学習に十分活用し、学生の留学や就職等の夢の実現に貢献したい。

謝辞

本研究の対象となるTOEIC L&R IPの実施と結果分析をするにあたり、多くの方々のお世話になった。本学の英語教育センターおよび前身のLLCの委員や教職員の方々はもちろんのこと、全学的なご協力がなければこの研究は不可能であった。とくに、多数の英語授業をご担当の先生方のご指導と、英語力を伸ばす努力を積み重ねた学生の皆様の努力に敬意を表したい。論文執筆に際しては、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（IIBC）から貴重な助言をいただいた。記して感謝申し上げる。

主な参考文献

- 土肥充, 「TOEIC IPによる千葉大生の英語力の現状分析」, 『人文と教育』, 千葉大学国際教育開発センター, 第2号, pp.15-29, <https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900040929/KJ00004373969.pdf>, 2006. (2021年10月20日閲覧)
- 土肥充・柳瀬弘美, 「千葉大学におけるTOEIC IPスコアの包括的分析」, 『言語文化論叢』, 千葉大学言語教育センター, 第3号, pp.31-45, <https://www.cphe.chiba-u.jp/ge/activity/archive/pdf/plc03-06.pdf>, 2009. (2021年10月20日閲覧)
- 土肥充・張智君, 「千葉大学におけるTOEIC IPとTOEFL ITPのスコア分析と経年調査」, <https://www.cphe.chiba-u.jp/ge/activity/archive/pdf/plc08-02.pdf>, 2014. (2021年10月20日閲覧)
- Educational Testing Service, The TOEIC Program —The Global Leader in English-language Assessment for the Workplace, <https://www.ets.org/toEIC/>. (2021年10月20日閲覧)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会, 「TOEIC ProgramテストDATA & ANALYSIS 2021-2020年度受験者数と平均スコア」, https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/daa_japanese_2021.pdf, 2021. (2021年10月20日閲覧)
- 久保田正人・土肥充, 「國學院大學の英語教育」, 『教育開発ニュース』, 國學院大學教育開発推進機構, 第21号, pp. 2-5, <https://img-kokugakuin.com/assets/uploads/2020/10/iatlnews21.pdf>, 2020. (2021年10月20日閲覧)